

稲作情報 No.1

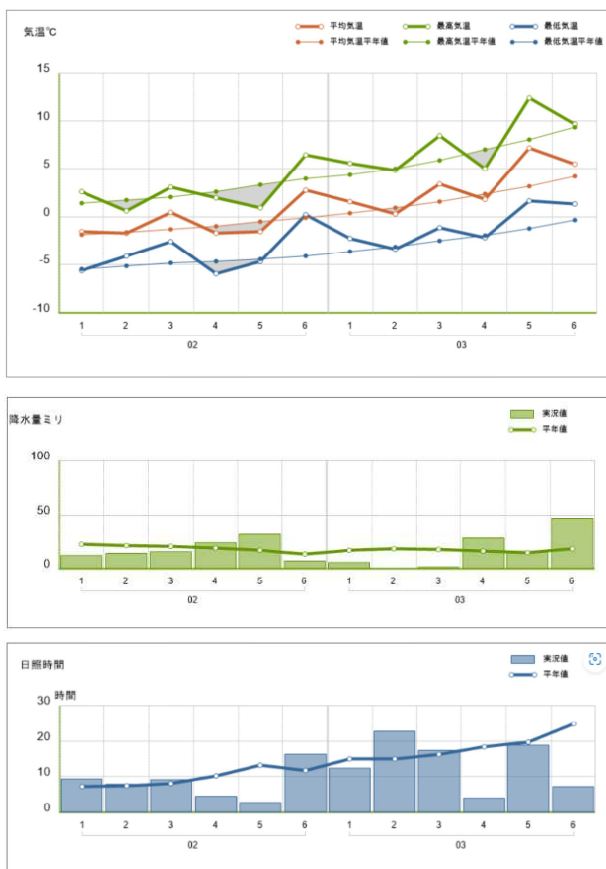
発行日: 令和7年3月31日
発行: 仙北地域振興局農林部農業振興普及課

～育苗期間中の高温障害に注意しましょう！～

気象経過と今後の気象予報

これまでの気象経過(アメダス大曲)

図1 半旬ごとの気象経過(秋田県農業気象システムより引用)



向こう1か月の気象予報(3/29～4/28)

- ・仙台管区气象台より令和7年3月27日に発表された1か月予報によると、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。
- ・平均気温は高い確率が60%で、週別の気温は1週目(3/29～4/4)が平年並の確率が50%、2週目(4/5～4/11)は高い確率が80%、3～4週目(4/12～4/25)は高い確率は60%です。
- ・降水量は少ない確率が40%、平年並または多い確率ともに30%です。

図2 東北地方 1か月予報(気象庁発表)

気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)		
気温	東北地方	向こう1か月 03/29～04/28
		10 30 60
		1週目 03/29～04/04
		20 50 30
降水	東北日本海側	2週目 04/05～04/11
		10 10 80
		3～4週目 04/12～04/25
日照時間	東北日本海側	10 30 60
		向こう1か月 03/29～04/28
		40 30 30
日照時間	東北太平洋側	向こう1か月 03/29～04/28
		20 40 40
		向こう1か月 03/29～04/28
		40 40 20

■低い(少ない) ■平年並 ■高い(多い)

令和7年産から「あきたこまちR」の一般作付けがスタートします！

カドミウム低吸収性品種である「あきたこまちR」は、従来のあきたこま치의栽培方法と大きな変更点はありませんが、砂質で秋落ちが認められるほ場に限っては「ごま葉枯病」の発生に注意が必要です。これまでと同様に土づくりや基本技術の励行により高品質な秋田米の生産を目指しましょう。

当面の技術対策

1. 播種準備

1) 田植時期の設定

- ・県南地域においては、あきたこまち(中苗)の場合は田植え時期は5月20～25日頃を目安とします。苗の種類によって必要な育苗日数を逆算したうえで、播種量・播種日を決定してください。
- ・田植え作業は、日平均気温が中苗で14℃以上の日に行い、最高気温が15℃以下の日は田植えを行わないようにします。

2) 播種量と育苗日数

- ・近年は中苗、稚苗に加え、高密度播種育苗も増加しています。また、稚苗並の播種量(乾粃150g以上)であっても、育苗日数は中苗と同様に管理している事例も見られます。播種量が多くなるほど、苗の老化やムレ苗、徒長苗が発生しやすくなるため、育苗様式に合わせた管理を徹底することで健苗育成に努めてください。
- ・作付け面積が大きく、田植え日数が1週間以上続く場合は播種を複数回に分けるなど、計画的に作業を進めてください。

●育苗の目安(70株/坪植)

	中苗	稚苗	高密度播種育苗
播種量(乾粃)	100g/箱	180g/箱	250g/箱
育苗日数	35日	25日	14～21日
葉数	3.5葉	2.5葉	2.1葉
草丈	13～15cm	10～13cm	10cm～
使用箱数/10a	27箱	20箱	10箱

【育苗の作業計画を作成しましょう！】

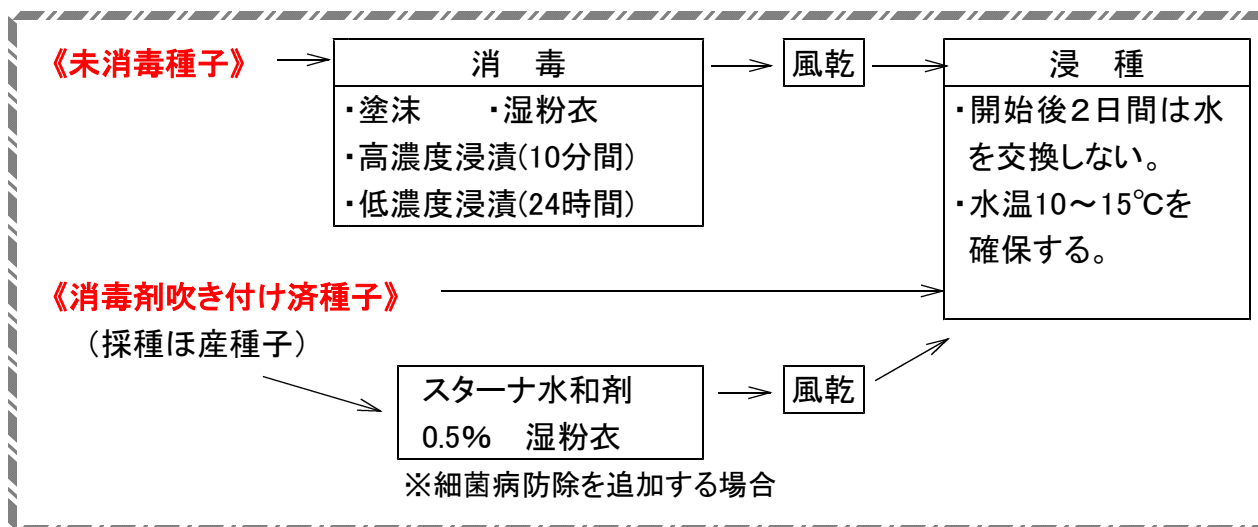
品 種	田 植 え	育 苗 日 数	播 種	2 日 前	催 芽	6 ～ 8 日 前	浸 種	2 日 前	種 子 消 毒
例 あきたこまち	5月20日	→(35日)→	4月15日		4月13日		4月 6日		4月 4日
	月 日	→(日)→	月 日	→	月 日	→	月 日	→	月 日
	月 日	→(日)→	月 日		月 日		月 日		月 日

2. 種子消毒～浸種・催芽

1) 種子消毒～浸種作業の流れと注意点

ばか苗病やもみ枯細菌病等防除のため、消毒、浸種の注意点を再確認しましょう。

- ①作業の流れ ※採種ほ産種子は、塩水選の必要はありません。
※種子袋への詰めすぎに注意(袋の7分目程度)してください。



②注意事項について

【作業環境】

- ・周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、種子予措を行う前に作業場所やその周辺を十分に清掃します。また、浸種、催芽時は容器にふたをします。
- ・浸種、催芽に使用する機器、容器は、使用前及び品種や防除方法が変わる毎に十分洗浄します。
- ・複数の品種や消毒方法の異なる種子や、採種ほ産とそれ以外の種子は、同じ容器で浸種、催芽しません。

【消毒時】

- ・浸漬法により種子消毒を行う場合は、防除効果を高めるため薬液の温度は10～15℃になるようにします。浸漬開始時に水温が15℃になるようお湯で調整します。
- ・薬剤の効果安定・向上を図るため、いずれの消毒方法も処理後に必ず風乾します。

【浸種】

- ・浸種の水量は、種子容量の2倍程度(種粃1kg当たり水量3.5L)とします。
- ・10℃以下の水温で浸種すると種子の休眠が深まったり、種子消毒の薬効を不安定にさせます。浸種温度は10～15℃を確保するように努めましょう。また、種子自体の温度が低いことがあるの注意してください。
- ・浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、15℃で6日程度とし、種子消毒剤の安定した薬効を確保するため水交換は2～3回までとします。
- ・均一な催芽のため、種子袋の中心部まで水が入るようにしましょう。
- ・浸種開始から2日間は、種子消毒の効果を高めるため、種子袋を揺すったり、水の交換をしません。

- ・浸種終了の目安は、粃殻を透かして胚が白く見えるようになった時です。
- ・水温を確保するため、できるだけ屋内で浸種します。

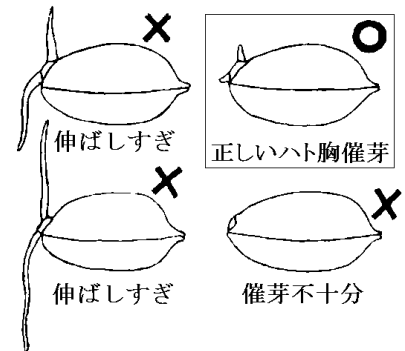


浸種十分の粃

浸種不十分の粃

2) 催芽のポイント

- ・袋内部の種子まで均一な温度になるよう、催芽前に36～40℃の温水で湯通しを行います。
- ・催芽は、30～32℃の温度で行います。芽の長さはハト胸程度(催芽長1mm)とし、伸ばしすぎると損傷が多くなるので、芽の長さに注意しましょう。



3) その他

- ・生物農薬(タフブロック、エコホープDJ)を使用する場合、ヘルシード剤、テクリード剤、スポルタック剤との体系処理、ダコニール・ダコレート・ベンレート剤の播種時処理は、生物農薬の防除効果が低下するため行いません(ただし、スポルタック剤はタフブロックとの体系処理が可能)。

3. 播種作業について

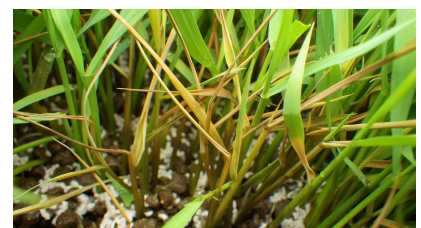
- ・床土の酸度はpH5.0前後とします。pHが適性でない場合、苗立枯病が発生しやすくなるので注意してください。
 - ・タチガレエースM粉剤は、播種時にダコニール1000または、ダコレート水和剤をかん注する場合、播種5日前までに床土に混和します。ただし、混和を早く行い、播種までの期間が長くなりすぎると薬剤の効果が落ちることがありますので、注意します。
 - ・苗箱と床土に隙間があると、箱内が乾燥しやすくなり、苗の不揃いや葉ヤケの原因となるので、苗床は均平にして苗箱を密着させるようにします。
- ※播種作業を始める前に、播種量の確認を行い、適量に調整してください。

播種時のかん水が不十分だと出芽不良につながるので、十分にかん水を行います。

4. 育苗期間のもみ枯細菌病や高温障害に注意

1) もみ枯細菌病について

育苗箱の一部に凹部分が見られることで気がつくことが多い病害であり、管内ではここ数年は発生が多く見られます。もみ枯細菌病は、新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色に退色したり、新葉を引き抜くと簡単に抜ける等の症状が特徴です。



【防除対策】

- (1)種子消毒剤の効果を十分に発揮させるため、種子予措を適切に行いましょう。また、浸種時の低温等により出芽ムラが生じた場合には先に出芽した粃は過剰な被覆期間となり、細菌病の発病が助長されることから、注意が必要です。
- (2)もみ枯細菌病は高温性の病害で、育苗初期の温度管理が重要です。出芽温度は32℃を超えないようにし、被覆期間を必要以上に長くしないように注意します。
出芽後の再被覆は発病を助長するため行わないようにします。
- (3)緑化期以降は25℃以上にせず、過剰かん水に注意します。
- (4)前年度に発病した場合は、資材消毒剤ケミクロンG等で育苗箱の消毒を実施します。

2)高温障害について

播種後の被覆期間中や緑化期にハウス内温度が高くなりすぎると高温障害によるヤケ苗(出芽不良や枯死)が発生する危険があります。高温障害による発芽不良等の被害が大きくなることで、苗の不足や経費のかかり増しに繋がってしまいます。

育苗箱付近への温度計の設置や天気予報を小まめに確認するなど、ハウス内の温度管理には細心の注意を払いましょう。

5. ごま葉枯病対策について

あきたこまちRの病虫害防除は、従来のあきたこまちと同様に実施します。

ただし、「砂質土壌でかつ秋落ち」が認められるCECが低い水田では「ごま葉枯病」が発生しやすくなるため、注意が必要です。

ほ場の条件によって、耕種的防除や薬剤防除が必要なのかどうか異なりますので、ご不明な場合は指導機関にお問い合わせください。

【耕種的防除】

- ・「砂質でかつ秋落ちが認められるほ場」では、土壌マンガン濃度が低い傾向にあります。そのため、土壌診断による「CEC(陽イオン交換容量)が15meq/100g未満」である場合はマンガン質肥料の施用による土づくりが必要です。

【薬剤防除】

- ・県内のほとんどの水田では、ごま葉枯病の薬剤防除は基本的に不要です。
- ・ただし、これまでに「ごま葉枯病が発生したことがあるほ場」や、過去に発病が無くても「砂質でかつ秋落ちが認められるほ場」では、本病に登録がある箱施用剤による防除が必要となります。

秋落ち水田とは・・・

砂質の水田、根腐れを起こしやすい排水不良水田などでは、幼穂形成期以降に生育が凋落し減収することがあります。